

「事実は小説より奇なり」と言うが、私たち親子は「裁判は小説より面白し」を経験した。最初の頃は、人によりのように話してよいか分からなかったので沈黙していた。しかし、年月というフィルターに掛けられてポイントだけが鮮明に記憶として残り、話しやすくなった。これは一九七五年、米国で当社が絡んだ花火PL裁判の顛末記である。わたし自身は非常にエンジョイした数週間間の裁判であった。今になって思えばアメリカ人の大らかさ、悪く言えば自分の意見を通すためにはガムシヤラに進む押しの強さを改めて知った。

これは最終裁判に出席した半月間の出来事の記録である。

事件は、一九七三年にテキサス州南西部のメキシコ国境に近いリオグランデ地方で、独立祭の花火打揚げの最中に起きた。花火の玉が観衆を直撃し、破裂し、双子の幼児の一人を死亡させてしまった。打揚げ人は、主催市の消防職員であった。最初の裁判原告・被告は複数で、もちろん双子の親が市当局を訴え、市は米国内の花火会社を訴え、花火会社は花火の輸入買い入れ先のフランス、イタリア、イギリス、ドイツなどの花火会社を訴えた。更に市当局が当日の大会に保険をかけていた保険会社と保険会社を保証している保険会社が絡んできた。話がややこしくなったのは、まず市が保険を依頼していた地方の小さな保険会社が支払不能との理由で自己破産したことである。そこで保険保証会社は、自己破産をした会社を訴えた。更にPL法に基づき訴えられた輸出元のヨーロッパの花火会社が、損害賠償支払能力がないことが判明した。

一方、当時当社の米国への花火玉輸出は全体の六〇パーセント近くを占めていたと記憶している。未だ中国では、日本型球状玉の輸出はされていなかった時代である。そして日本国と、日本の企業は、金持ちであると言われる時代であった。裁判の関係者の中に頭の働く人が

いて、日本からの輸入玉が有ったのではないかとの話になり、大会に数パーセント日本玉が含まれていたことがわかった。もちろん、当社の玉も米国の大手の花火会社を通して売られていた。

裁判の後半で、裁判所から「召喚状」が届いた。当時、当社は米国東部の方でもPL裁判を行なっていた。このテキサス裁判がこんなに込みいったもので、しかも裁判関係者が賠償金の最後の出所を「日本の金持会社」に注目しているとは思ってもみなかった。先ず、裁判の公聴会（ヒアリング）がハワイで行なわれた。当時の貿易部長は飛行機に乗るのが大嫌いな人であったので、当時社長であった私の父親が出席した。ここから世にも不思議な裁判が始まるとは、誰一人考えていなかった。父は、英語が結構出来ると本人は思っていた。それはアメリカ人が会話の中で頻繁に使う「フフン」が言え、時には「サンキュー」が言えることであった。しかし、父は第二次世界大戦で陸軍造兵廠の監督工場を経営し、その間、陸軍上等衛生兵として外地にもいた経験があり、戦後はマツカサー司令部から最初にマツチ製造の許可を取得して儲けた自信が潜在的にあったと思う。そして戦後、外国に一人で花火を打揚げに行つたことも自信につながっていた。

その父に、ハワイでのヒアリング（相手側弁護士による証人尋問）に火薬や兵器の知識の乏しい通訳の方がついてしまった。その席で父の戦争中の工場での製品を訊かれ、照明弾を帝陸軍のために製造していたと言った。通訳は、弾を「ブルエット」と訳し、父も通訳人も事の重大さに気づかなかつた。日本では照明弾とは上空に発射する照明筒の意味である。ところが、いつのまにか、「弾」だけが一人歩きをして殺傷用弾にすりかわっていた。

それから数か月して、テキサス・リオグランデでの最終裁判が始まることになった。永田町にある国際法律事

務所、ニューヨーク・テキサスにある各法律事務所との調整が始まった。いつのまにか米国裁判行きは、飛行機嫌いの貿易部長と自称英語通の父との間で、私を行かせるといふ話になっていった。一方英語の苦手な私は、米国の大学の学士入學で数学・化学の理系ダブル・メージャで辛うじて助手奨学金を貰って卒業し、米国の機械メーカーで働いていただけの経験であった。英語が得意であればロー・スクールにでも入っていただろう。

そんな私は、三省堂のコンサイス英和辞典をしつかりと握ってテキサスの地に降り立った。裁判所はヒューストンから車で何時間もかかる田舎町にあった。ところが裁判所を見て驚いた。この裁判所は小さな町に似合わないほど立派な石造りであった。未だ建築後数年とのこととで、その建築理由を弁護士さんから聞いて再び驚いた。判決に不服な市民が木造の裁判所を燃やしてしまったので絶対に火事に強い建物にしたとのことであった。市民にはメキシコ系の人が多く、非常に熱血漢が多いとのことであった。ホテルの「公用語」はスペイン語であった。裁判中にトイレに行くときは何時も警官がガードしてくれた意味があとでわかった。日本人は年に一人通過するぐらいの町であった。

まず、裁判は十のグループがかかわっていた。私たちは、裁判中酒を断っている若い主弁護士先生と酒の好きな老弁護士先生の二人と私であった(図1)。全体では相当の人数になった。陪審員選びから始まった。第二次大戦中に日本軍に親族を殺された人を相手側は選ぶとうし、我がグループは、日本びいきのインテリ層を選ぶとうと攻防が始まった。

それは、相手側の主張が、当社は戦争中多くの米国人を「弾」で殺傷し、戦後はそれが出来なくなつたので、花火玉を米国に大量に輸出してアメリカ市民を殺害しているとの論法を進めるためであった。

裁判の初日にスピーチを数分間させられた。陪審員が

ら完全に無視された。英語下手がしゃべると英語が不得意のメキシコ系の人たちという理由だけではなかつたと思ふ。父が発見に際し、どんなことが起こつても日本に帰つてこいよという言葉がズシリと思ひ出された。

裁判は朝の八時過ぎから夕方五時ごろまでの、土日を除く毎日であった。裁判の間中、朝から夕方までコンサイス辞典を開き放しであった。法律用語は本当に分からなかつた。

主な争点は、双子の幼い姉妹の一人が亡くなつて、他の一人が正常に成長できるか？日本の敗戦後の花火玉による攻撃陰謀は？上空に発射したものが観覧席に飛翔する物理的要因は？等々であった。最初の争点は、心理学者や幼児教育専門家などが意見を述べていた。二番目の問題については、照明弾の翻訳ミスに気づいた。三番目の問題も、アメリカのメーカーのカタログに斜め発射が記載されていた。二番目と三番目の解は、裁判中に私が探し出した。

審議も最終段階になり、被告側の私も最後の陳述の機会が与えられた。今度は三十分間位弁明の時間をもらつた。わたしの経歴、教育、家族構成、宗教などを陪審員に向かつて話をさせられた。今回は、陪審員全員が私の話に耳を傾けていることが感じ取れた。もつとも、裁判の一週間位経過した頃から、原告の幼児を亡くした若いお母さんを含めて、休憩時間などに私に話しかけてくるようになつていった。どうしてかは理解できなかった。

この裁判所地帯がバイブルベルトと呼ばれる宗教色の強い地域帯に属していることは知る由もなかつた。朝から一日中、コンサイス辞典を開いては読み、閉じては考え込んでいる私を、朝から聖書を読んで瞑想していると、陪審員の方々が思い違いをしても不思議ではなかつたと思ふ。しかも、私はカトリック教徒で、当時洗礼を受けたばかりであった。勝負はついてしまった。私の立場は、鼻持ちならない金持ち日本人から戦後の経済復興

に汗を流しているマイナー民族に変わっていた。陪審員のほとんどが同じマイナー民族で同宗の人たちであった。花火を客席に向かつて斜めに発射しない限りは、この惨事は起こらなかつたことも納得してくれた。

採決が出た直後に新聞記者がきて、花火を打揚げていた市職員全員が独立祭のお祝いでへべれけに酔っていたことを教えてくれた。

裁判からの帰途、テキサスの田舎で食べたステーキの厚さと無罪放免の嬉しさとが、今でも昨日のことのように思い出に残っている。

もつとも、それから数か月後に米国東部で行なわれたPL裁判でも、テキサスの弁護士先生からニューヨークの法律事務所へ強い推薦があり、再び出向く羽目になつてしまった。

今後も危険なものを扱うので安全第一を配慮して経営に臨んでいきたいと考えている。そうしないと神様は二度と支援の手を差し伸べてくれないだろうと信じている(図2)。



図2 勝利を祝って天に乾杯



図1 わが弁護士先生達